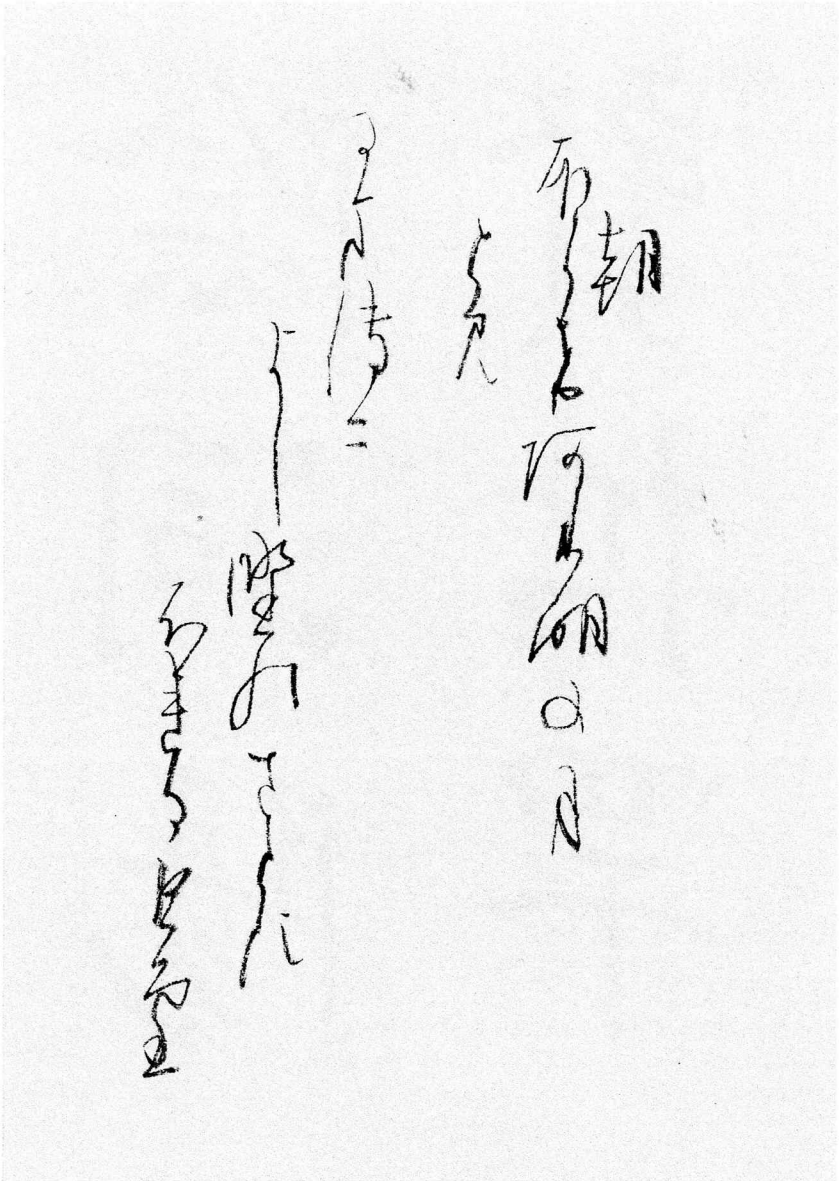
『百人一首』中村素堂先生の仮名散らし書きの魅力（三十）

朝ぼらけ有明の月と見るまでに　吉野の里に降れる白雪

坂上　是則



中村素堂先生の書　畫間欽堂先生提供

〈歌意〉

「明け方、空に残っている月の光かと見間違えるばかりに、この吉野の里に、白く降り積もっている雪であるなあ。」

この歌は『古今集』（冬・三三二番）に出ています。

大和の国に下った時、雪の降る景色を詠んだ歌。

（坂上是則）

生没年未詳。（一節説、延長八年）征夷大将軍・坂上田村麻呂の子孫で九世紀末から一〇世紀の歌人。

〈よみ〉

朝

本ら希　阿利明の月

と見

る万傳二

よし野能さとに

不連る白雪

行の長さに、空間のバランス、連綿の長さが特徴的です。

（青藍）